

国際地理学会 (IGU) サンチャゴ (チリ) 大会から

2011年11月14日から18日まで、国際地理学会の地区大会が南米チリのサンチャゴで開催されました。昨年のテルアビブ（イスラエル）大会に続くものですが、世界中を渡り歩く地理学会といえども、南米での組織には苦闘しているようで、ブラジル大会以来、ずいぶん久しぶりの2回目とのこと。また地区大会は地元ホストの影響が大きく、昨年のテルアビブとは趣がかなり違い、場所も陸軍のもつ大施設、厳格な入場管理のもと会議は厳かに進行しました。昨年の初日は延々とオーニングレクチャーが続いたのですが、今回はきわめて淡泊で、その代わりに民族音楽や舞踊などが嵐のように続きます。ごちそうだった前回と違い、カクテルパーティーも淡泊で、500ドル近い登録料に不満をもらす参加者もいました。とはいえ、9つある全セッションすべてで5日間フルに英語とスペインの同時通訳を導入するなど、民間ベースでは到底できない力量も見せつけられました。



本 GCOE プログラム「境界研究の拠点形成」と新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」が共同でつくった「パネル」（国際地理学会はパネルでのプロポーザルは受け付けないため、個人で出してアクセプトされたものが一緒になったもの）では、北東アジアのボーダーをテーマとして、現地の研究者が見守るなかホットな議論がなされました。中央アジア地域もカバーする日本でもなじみの中国学者クリストファー・レン（シンガポール在住）、日露関係の研究で進捗著しいアレクサンドル・ブフ（筑波大）、ロシア極東におけるマイグレーション研究のイニシエーター、ミハイル・アレクセーエフ（サンディエゴ大）に、私の4人がプレゼンターとして報告をしました。4人の誰もが地理学者ではないのですが、政治地理学コミッションのアントン・ゴースー（プリモルスカ大、スロベニア）やウラジミール・コロソフ（ロシア）ら主要メンバーも積極的に議論に参加し、政治地理学の世界に「新風」を巻き起こしたと確信しています。



ポスターセッションでは、[BRIT XII のポスター](#)を出展し、プレゼンの時間帯には、ポスターの前で ipap 2 を駆使し、フォト・スライドや映像（GCOE プレゼンツの DVD 対馬編など）を行き交う人々の前に披露しました。現場をいかに伝えるかが、ボーダースタディーズの醍醐味ですが、これまでにない画期的なプレゼン・スタイルが確立できるのでないかと手応えを感じました。



地理学会本体は正味 4 日間ですが、会期中のみならず、その前後 1 週間もさまざまな現場視察のツアーやトリートが行われます。会議にあわせて現地の実情を専門家のインストラクションによって学ぶという地理学者たちのアクティビティが、BRIT やヨーロッパ ABS による境界地域視察を織り込むというコンベンション・スタイルを生み出したに違いありません。なお 2013 年の地区大会は京都での開催が決まっており、本 GCOE プログラムも協力する予定です。

(岩下明裕)